

キリスト教思想における自然諸問題

第一章 自然神学とその再構築

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1. 自然神学の成立とその意義 | 2. 中世から宗教改革 |
| 3. 科学革命と自然神学 | 4. 近代イギリスと自然神学の伝統 |
| 5. 進化論論争と自然神学 | |

第一章 自然神学とその再構築

5. 進化論論争と自然神学

1. 自然神学の伝統と生命論

2. 進化論と自然神学

(1) 自然神学にとっての進化論の意義

1. 「科学と宗教の関係を理解したいと願う者は誰でも、主要な三つの歴史的出来事をよく知っておかなければならない。それらは、第一に、一六世紀と一七世紀初期の天文学論争であり、第二に、一七世紀後半と一八世紀のニュートンの世界観の勃興であり、第三に、一九世紀のダーウィンの進化論論争である。」(McGrath[1999], p.1)

2. 「自然神学の文献は二重の役割を演じた。それは、キリスト教徒に対して、聖書からの証拠と同一の水準に立つ自然からの証拠を与えた。同時にそれは、博物学者には、それに反する証拠が無い中で、種々の生物において観察された特性に対する合理的な仮説を提供した。」(Dupree[1986], pp.354-355)

(2) キリスト教思想における進化論への応答

3. キリスト教思想における進化論への応答、「進化論対創造論」

反ダーヴィニズム(ウィリアム・ドーソン、ルイ・アガシー) / 進化論とキリスト教思想の調停(フレデリック・テンブル) / キリスト教進化論者(エイサ・グレー)

4. 「対立図式」: ドレイパーとホワイト、ウィルバーフォース伝説(1860年6月30日)

5. 19世紀段階では、進化論をめぐる論争は、まだ十分な理論的水準にまで深められてはいない

6. 「科学と宗教の対立図式」成立の社会史的文脈

「部分的には、対立は19世紀初頭のイギリス社会における二つのエリート集団間の闘争を反映しているものとして社会学的見地から見る事ができる。社会学的観点から、科学的知識は特定の社会集団がそれ自身の特殊な目的と利害の達成に向けて構築し発展させた文化的資源と見る事ができる。このアプローチは19世紀のイギリス社会内部

における二つの特別な集団の間、すなわち聖職者と科学専門家との間に高まりつつあった競合関係の解明に大いに資するものである。聖職者はこの世紀の初めには、＜科学的牧師＞という確立した社会的固定観念によって、エリートとして広く認められていた。しかしながら、＜専門職業的な科学者＞の出現によって、19世紀後半における文化的主導権を誰が握るのかを決する優位をめぐる闘争が開始された。＜対立モデル＞は、新興の専門職的な知的集団がそれまで名誉ある地位を占めていた集団に取って代わろうとしたビクトリア朝時代特有な条件によって、理解可能になるのである。ダーウィン理論の高まりはこのモデルに対して科学的正当性を付加するように思われた。それは、知的に最も才能ある人の生き残りのための闘争だったのである。19世紀初頭、英国協会は聖職者であるメンバーを多く擁していた。実際、＜科学的牧師＞は当時の受け入れられた社会的カテゴリーであった。この世紀の終わりには、聖職者は科学の敵対者、それゆえ社会的また知的な進歩の敵対者として描かれるのが一般的傾向になった。」(McGrath [1998], pp.21-22)

7 . 20世紀のキリスト教神学の有力な流れは、19世紀的な対立図式から、科学と宗教との分離・区別へと大きな転回を示す

8 . 代表的な神学者：バルト、ブルトマン、ティリッヒ、ニーバー兄弟ら
信仰と科学とは次元が異なる

ブルトマン（聖書テキストの実存論的解釈、信仰と世界観との分離）
キルケゴール（主体的真理と客観的真理との区別）

9 . キリスト教思想と自然科学との区別を認めつつも、両者の分離を最終回答とすることに対して批判。キリスト教思想と自然科学とを統合する形而上学的枠組み。

10 . 創造論者（creationist）

聖書の不可謬性
生物の基本的類型（種）の不変性
世界規模の大洪水の史実性

11 . John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy, Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, Politics, and the Economy*, State University of New York Press 2002

Many passionately affirm as essential to faith beliefs and attitudes whose sources are quite extential to the tradtion. (17)

12 . Livingstone, David N., Re-placing Darwinism and Christianity, in: David C. Lindberg and Ronald L. Numbers (eds.), *When Science & Christianity Meet*, The University of Chicago Press 2003

it has not even been possible to come to a final judgement on the religious sentiments of

Charles Darwin himself. (183)

I think it is a mistake to hope for closure on the final state of Darwin's soul.

These jottings surely confirm the conclusion that Darwin's religious beliefs "never entirely ceased to ebb and flow ... At low tide, so to speak, he was essentially an undogmatic atheist; at high tide he was a tentative theist; the rest of the time, he was basically agnostic ---- in sympathy with theism but unable or unwilling to commit himself on such imponderable question. (187)

He had, for instance, absorbed the essentials of William Paley's *Natural Theology* during his years at Cambridge, and its flavor was to linger in his own writings in manifold ways.

Such correspondences provided Darwin with a captivating analogy: natural selection.

Darwin moving casually between God and Nature

Darwin's indebtedness to theology should not be limited to architectural echoes of Paley.

(188)

All in all science and religion were thoroughly interwoven in Darwin's life and thought. (189)

he insists that it should be transformed into a *social struggle* for cultural control between the old-fashioned parson and the new thrusting scientific professional. Victorian society, in other words, was witness to a conflict, *not* so much between science and theology, but between scientists and clergymen. Because cultural authority was progressively slipping out of the hands of one elite (the clergy), and into the hands of a new elite (the professional scientists), scientific inquiry became one further arena in which cultural, not simply cognitive, interests were fought out. (191-192)

He (Robert M. Young) has persistently urged that it is wrong to think of the post-Darwinian debates as an encounter *between* science and religion. To think this way, he urges, is to fail to realize just how profound was the *continuity* between theological and scientific belief systems. To him, the existing social order, built on hierarchy, domination, and class privilege, was justified throughout the nineteenth century, first by an appeal to religion, and then by an appeal to science. Wealth and poverty, prosperity and penury were simply the expression of either the laws of God or the laws of nature. (192)

It is plain, that both White and Draper were waging war in the cause of scientific rationalism. And it thus makes sense to speak of the political origins of the conflict thesis. Of crucial importance in this scenario was the role played by Thomas Henry Huxley and the X Club. (194)

In recent years philosophers, social theorists, and historians of science have begun to turn away from grand theories and general narratives toward local conditions and specific circumstances. Ideas, to put it another way, need to be located in particular contexts; they need to be literally "placed." The implications of this move for reconstructing the historical relations between Darwinism and Christianity are of considerable proportions. (197)

In 1874, in two cities, Presbyterians with seriously similar theologies pronounced judgement on the theory of evolution. In Edinburgh and Belfast, different circumstances prevailed and differing rhetorical stances were adopted. (198)

What this move makes clear is that the encounter between Darwinian science and the Christian tradition cannot be squeezed into the mold of conflict or cooperation. Accordingly we might be well advised to abandon the search for a "relationship" between such disembodied "isms" as Darwinism, evolutionism and evangelicalism, and their more-or-less distant cousins --- materialism and theism, naturalism and deism. (202)

(3) 展望 - 進化論と創造論の争点をめぐって -

13. 進化論と創造論との争点の再検討

目的論 (teleology)、¹「主要な理由 (近代科学において目的論という概念が不評であることの理由。引用者補足) は、未来の出来事 - 過程の目的あるいは最終産物 - がそれ自身の現実化における積極的作用因であるという信念と目的論という観念とが同一視されたことにある。」 (Ayala[2000], p.19)

14. Ayala[2000], p.19

内的 (自然的) な目的論: 人間の目が見ることために構成されてことは明らかであるが、しかしそれは自然のプロセスからの帰結であること

外的 (人工的) な目的論: 外的行為者によって物を切るという目的でナイフがデザインされる場合

拘束された (必然的) な目的論: 卵から鶏への成長の場合

非拘束的 (偶然的) な目的論: 進化の発展過程は事実として哺乳類の出現へと進んだが、最初の生命細胞に哺乳類の出現を必然的に帰結するようなものは存在していない。

15. 目的論とは

「目的論の観念はおおよそおそらくは我々自身の意志的行為と結合した環境への反省の結果として生じたのである。行為の予期された結果が人間によって自らの行為が向けられる目標あるいは目的として考えられるのである。.....この意味で、目的論概念は一定の目標あるいは最終状態への方向付けを示す行為、対象あるいは過程を記述するために、拡張可能であり、また拡張されてきたのである。.....この一般的な意味で、目的論的説明は、あるシステム内における対象あるいは過程の現前をその対象あるいは過程がその存在と保持に対して寄与するシステムの特定の状態あるいは特性とのつながりを示すことによって説明するものなのである。.....本質的な要素は、システム内の対象や過程の形態の特性がその形態の存在についての説明的理由となるにちがいないということ、目的論的説明が要求する点にある。.....目的論的説明は生命における適応の存在を説明するのに適当なものであるが、それは生命のない自然の領域では必然的でも適切でもない。」 (ibid., p.28)

16. 「魚のえらの機能は呼吸 (血液と外部の水との間の <酸素 - 二酸化炭素> 交換) である」という言明は、それが「魚 (S) が水中という特定の環境 (E) に置かれたときに、呼吸という機能 (F) を果たすのは、それがえらという形態 (A) を有する場合に限られ

る」、「有機体の適応はその存在が究極的に種の複製適応度に対する寄与によって説明される場合には、目的論的に説明される」(ibid., p.30)、「生命のない対象や過程は、特定の目的に向けられているのではないから、目的論的ではない」(ibid., p.31) - 天体は人間を楽しませるために輝いているわけではない - 、また「有機体のすべての形態が目的論的に説明されるわけではない」(ibid., p.32)、「自然選択」もまた、「それが目的に向けられた機関や機構を生産し保持するという意味で、それら機関や機構の機能が生命の複製能力に寄与する場合に目的論的と言われ得るのである。」(ibid., p.34)

17. 進化論と創造論の争点は、目的論一般の問題ではない。「目的論的説明は因果的説明と両立可能」(ibid., p.37)。

「目的論的説明はその明示的な内容を失うことなしに、非目的論的説明の形式を取るように常に再定式化できるのである(ナーゲル)」が、「これらの因果的説明は、目的論的説明がふさわしいところでは、目的論的説明を行うことを不要にはしない。……目的論的説明はそれと等価な非目的論的説明以上の何かを内包している。目的論的説明は当該のシステムが方向性をもって組織化されるということの意味する。この理由から、目的論的説明は生物学において適当ではあるが、石の落下や惑星の運動といった自然現象を記述するために物理学で使用されるならば、意味をなさない。さらにその上、そしてもっとも重要なこととして、すでに論じたように、目的論的説明は、最終結果はそれに役立ちあるいはそれに導く対象や過程の存在を説明する理由である、ということを含意しているのである。」(ibid., p.37-38)

18. 拡張された目的論 では、争点は偶然性と必然性か？

「生きた有機体における目的論の存在は、自然選択と変異や他の確率論的現象との有機体の環境への適応過程における相互作用の特有の結果である。この過程の結果が進化である」(ibid., p.18)、「偶然と必然の、あるいはランダムなプロセスと決定論プロセスとの相互作用」(ibid.,)

19. 「自然選択は、択一的な遺伝子単位の複製の相対比率における統計的な偏り」(ibid., p.22)、「自然選択は目の機能的有効性を高めるような遺伝子と遺伝子の組み合わせとに有利に働く。この遺伝子の単位は徐々に蓄積される。……それが有効性を発揮するのは、環境によって条件付けられているからである。(ibid., p.25)

20. 「偶然性は進化のプロセスの不可欠の部分なのである。……変異と選択は、微細な生命から始まり、蘭、鳥、人間をほとばしらせる驚くべきプロセスを、共同して推進するのである」、「進化論は生命という事柄と一緒に含意された偶然性と必然性とを、自然のプロセスにおいて結合されたランダムさと決定論を顕わにする。この自然のプロセスは宇宙におけるもっとも複雑で多様かつ美しい諸実在を入念に作り上げる。……意識的ではないものの創造的なプロセスが存在すること、これがダーウィンの根本的な発見なのである。」(Ayala[2000], p.27)

21．進化論と自然神学との争点は、進化論における突然変異の偶然性と自然神学における目的の必然性との間にあるのではなく、進化という目的論的説明が可能な対象をめぐる具体的な理論構成の内容にある。

22．「有神論的科学家にとって、またおそらくは神にとってさえもまた、偶然性を有する世界は、それが欠けている世界よりもはるかに興味深いのである。信仰の目によって見られるとき、世界は目的、方向をもって、またより高い組織へ向かう運動の広範な感覚を伴って組織されているように見える。しかし、それは全体的な設計図を必然的に伴っているわけではないのである。それは不確実性とカオスの宇宙である。」(Gingerich[2000], p.129)

「宇宙は内省的な知性の出現を許すような特異でかつ驚異的な仕方で構築されており、人類に適した故郷なのである。有神論者にとって、天は神の栄光を物語り、大空は神の手の業を示している。無神論者にとって、これらの驚くべきものは、単なる事実であって、証拠でも指示を与えるものでもなく、また神の意図やデザインの証明でもない。しかし、無神論者でさえも、我々の宇宙が歴史を持っており、歴史の偉大な進展が地球のような居住可能で生命の住む惑星の出現を含んでおり、それには、創造性、良心、自己意識を与えられた人間にとってとくに適した故郷も含まれることを認めねばならない。この歴史を詳細に見るとき、我々は偶然性の役割を見るのである。神学者にとって、偶然性とは神が配慮をもって被造物の中に自由の要素を作り込んだことを示唆するものであって、この自由の要素は神自身の像において創造された我々人間にとって恐るべき選択責任をもたらすものなのである。」(ibid., p.130)

23．まとめ

争点は因果律と目的論との間にあるのも - 「世界には、少なくとも人間には、目的的な活動が存在するが、人間を含めた生命の特有の構造は、目的的な行為の結果として説明される必要はない。……自然選択は特別な種類の生命あるいは特別な特性へと進化を方向付けるものでは決してないのである」(Ayala[2000], p.36-37) - 、また神のデザインと自然選択との方向付けの度合い(デザインは決定論的であって進化の方向付けが一義的であり、自然選択は突然変異との相互作用を行っているため方向付けが曖昧である、など)にあるのもない。

24．さらなる考察へ

「宇宙における超自然的意図の存在を論理的に絶対誤りのない仕方で証明しようとするとき、我々は行き詰まってしまう。」(Gingerich[2000], p.124)

25．進化論と創造論との対立は、両者の説明方式の論理性の違いをめぐってなされてきた誤解 - 自然神学の厳密には「論証」というべきでない議論を、科学的論理的な「論証」と混同したこと - にその一端を帰することも十分可能であろう。

<文献>

- Ayala, Francisco J. : Darwin and the Teleology of Nature, in: Haught[2000], pp.18-41
- Bentley, Richard : A Confutation of Atheism from the Origin and Frame of the World., 1693
in: I. Bernard Cohen (ed.), *Isaac Newton's Papers & Letters on Natural Philosophy and related documents*, Harverd Univ. Press 1958
- Dupree, A. Hunter : Chrsitianity and the Scientific Community in the Age of Dawin, in:
Lindberg/Numbers[1986], pp. 351-368
- Gingerich, Owen : Is There Design and Purpose in the Universe?, in: Haught[2000], pp.121-132
- Haught, John F.(ed.): *Science and Religion in Search of Cosmic Purpose*,
Georgetown University Press 2000
- Jacob, Margaret C. :*The Newtonians and the English Revolution 1689-1720*, Gordon and Breach
1976
- Lindberg, David C. and Numbers, Ronald L.(eds.), *God & Nature. Historical Essays on the
Encounter between Christianity and Science*, University of California Press 1986
- Livingstone, David N., Re-placing Darwinism and Christianity, in: David C. Lindberg and Ronald
L. Numbers (eds.), *When Science & Christinity Meet*, The University of Chicago
Press 2003
- McGrath, Alister E.: *The Fowndations of Dialogue in Science & Religion*, Blackwell 1998
: *Science & Religion. An Introduction*, Blackwell 1999 (稲垣久和他訳『科学
と宗教』教文館)
- Paley, William: *Natural Theology* (1802), in: *The Works of William Paley*, Thoemmes Press
1998
- Ray, John :*The Wisdom of God manifested in the Works of the Creation* (1691),Georg Olms
Verlag 1974
- 佐々木力 『近代学問理念の誕生』岩波書店 2000(1992)年
- 松永俊男 『ダーウィンの時代 - 科学と宗教 - 』名古屋大学出版会 1996年
- 村上陽一郎 『近代科学と聖俗革命』新曜社 1976年